
トネクター

はんでい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トネクター

【Nコード】

N4670Y

【作者名】

はんでい

【あらすじ】

トネクトという超能力の持ち主が通う学校、トネスクに通う生徒達が戦うお話。

火奈

「わあああああああつ！！辞めてください！私達が悪うございましたあああああつわあああああ熱い！熱い！助けてくれええええあああああ！！」

ブワアアッ

路地裏で、炎が燃えていると通報を受けた警察は、動かない。警察署で座っているだけだ。

「またアイツか」。どうにかして捕まえたんだけどなあ。あんな熱い炎なんていくら警察の私達でも無理だよなあ。それに、顔も見ただけもないし。」

「——ハア……。誰が許すかってんだ……。だが、一つ頼み事をした。頼み事をこなしたら殺さないで置いてやる。かもな。」

「頼みごと……？は、はひいっ！！裸踊りでも、なんでもさせてください火奈さままあああ！」

「じゃあ、今すぐ食料を調達して来い。ちなみに——警察や商人。とにかく誰かに助けを貰おうとしても無理だぜ？言う前に焼き殺す。」

「はひい！——」

「とにかく、お前は何も言わず食料をとりに行つて来い。」

「はひい！！今すぐに——」

何分が経過して、這いずりながら血まみれでコンビニの食料を抱きかかえ戻ってきた。

「ハアハア……。持って来ました……！！盗んで、殴られて。大変でした……。でも食料は安全安心ですのでどうか……命だけは……！！」

「ふうん。パンか……。」

抱きかかえてきた血まみれのパンの袋を一瞬で燃やし、パンを口に入れる。

「あむ。ほむほむ……。悪くはないな。」

「おおぅ！！では、命はお助け」

「死ね。」

ブアワアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！

一瞬にして血まみれで真っ赤な身体が炎でもっと赤く、紅く染まっ
て炎が小さくなっていき、プスプス、と音を立てて真っ黒色の粉が
残る。

「楽だつたろ？他の皆は苦しみながら死んでいったんだ。お前は助
かった。というべきだよな、痛みからこの俺が助けてやったんだ。
あははははははは！！！！！！」

—— チュン、チュン、チュン。

「おはよ〜」

「おはよ〜、今日もいい天気だよね！」

「ねえ、知ってる？昨日また路地裏で出たんだって……！炎のトネク
ト持った奴！」

「うん、知ってる！名前も顔も性別も分からない謎のトネクト持ち
主なんだってね……！」

「俺のことか……。」

一人ボソリと呟く。悪いことをしていない人間は勿論殺さない。ど
つかの悪いトネクト持ち主とは違い、罪のない人間は殺さない主義
だ。人を殺すのだから同じだが。

「あ！みいちゃん達、おはよ〜」えへへ 皆、朝早いねっっ」

「あ〜比奈ちゃんだあ〜！！おはよう！！」

ピクリと動く耳。「ヒナ…ちゃんだ…と？」

炎、沸騰温度100度を完璧に越してメラメラ音を立て、「ヒナ」という少女を焼殺した。

「比奈…ち…や…？」

少女の肉、跡形も残さずに燃やし、ただただ煙と悪臭が半径30キロを包む。周りに人はいなく、ヒナという人物の焼殺を見たものはたったの少女2人。

「…こ、この殺されかたって…炎の…トネ…ク、ト？」

後ずさりしながら炎のトネクトを思い出す。殺すのは悪人と聞く。

「比奈ちゃんが…。焼殺された…？そんな…。私どうしたら…。」

二人の少女は、この場から離れられず、ただただ、涙を流して人生最大の瞬間を目の前にする。

「他に…ヒナってガキはいねえか…？」

真後ろの路地裏から声が聞こえてきた。

「ふひい…！？」

二人の少女は身体がピクリと動き、真っ青になった。

「だっただだ…誰…？」

「問いに答える…。他に、ヒナってヤツはいねえのかあっつ！？」

少女の周りがグルリと炎で包まれた。

「ひいやあ…！し、知りません！居たとしても私の知り合いにはいません…！！本当です！」

二人の少女は声を合わし叫ぶように泣いた。すると周りの炎は消え、後ろに気配を感じた。が、二人とも振り向くことなくお急ぎで立ち、走る。

「ハアハア…。悪いなヒナさんよう…。俺さ、ヒナって名前のつく女…嫌いなんでい…。」

一人呟いていると後ろから声が聞こえてきた。

「ウチの生徒を殺したのは君かあ……。ハデにやってくれたじゃないか。これじゃあ上の子でも無理だ……。なあ……。」

「ッ、誰だ!!」

振り向くとそこには老人が立っていた。

トネクト学校。

「うむう？ワシかあ？ワシは、トネクト学校の学校長を勤めている本田じゃ。よろしくの。」

頭の毛はほぼ、なく、小さい身長で優しい一般の老人だった。

「はあ…。なんだ、ビックリさせんなよ。じじい。」

「じじいじゃなく本田さんと呼びなさい…。まあよい、若い者は素直が一番じゃからのおふおふおつ…。」

本田は『フオフオフオツ』と笑っているくせにたあと何十本か抜けている歯を見せながらニタニタネタネタ笑っていた。

「人が死んだのを目撃してるくせに冷静だなじじい。何者だ？」

「じゃから言つとるじゃろな。ワシは、何者でもなく、校長先生じや。人が死ぬのは日常茶飯事。ただ、ワシの生徒だから少しおこつとるだけじゃばきやもん。」

一瞬にして目から光がなくなっただと思うとその場にしゃがみ、比奈さんの灰を集めたした。

「この子のお…、結構優秀じゃったのう…。逝くには早すぎる若さだしのう…。ああクワバラクワバラ…。」

灰をすべて集め終わると空にブワァァと飛ばし、下を向く。

「この子も優秀じゃったけど、お前さん、もっと凄いの？名前はなんていうんじゃ？」

「俺…？名前なんて言う訳ないだろ、見ず知らずのじじいなんかに…。」

「名前さえ教えてくれたら、いい場所を紹介してやろう。もっともーっと強くなつて、世界一強くなれるかも知れんぞ。」

少しの沈黙の後、口が動く。

「ひ…ヒ。ヒナ。火奈。俺、火奈。」

「ヒナア？可愛い名前じゃのう。」

自分の名前を名乗るのは初めてだった火奈。本田が言う『もつと強くなれる場所』を知りたいがために名乗った。

「じゃあ、ワシに着いて来なさい。ハグれるなよ？ふおふおふおつ…。」

本田はゆつくりとマイペースではるか北を目指し歩いた。

そして、長かったのか短かったのか一言も会話を交わさずにとある学校へ到着した。

「ここ…じゃの。」

「ト…トネクト学校…？なんだそれ…、トネクトの学校…？学校ってなんだっけ…。」

「悩め若者。では、改めて。初めまして。ワシはここの学校長本田。これからトネクト学校に入学する『火奈』なにとぞよろしく願おう。」

あまりデカクなく、運動場といった普通の学校にあるものは無く、校舎とあと二、三個大きな別館らしい館がある。

「学校案内や見学も大事だがまずはクラス決めといこうじゃないか。校舎の左にある『クトルーム』へ来なさい。そこで火奈の実力を試し、実力にあったクラスへ行ってもらう。実力が高ければ高いほど良いクラスにいき良い授業を学べるぞ。もちろんだが一度入学したら帰れない。両親とは話を——」

火奈の口から炎が出てきた。的どころか、的をつけていた鉄の棒まで熱く熱く溶かした。

「ふう…結構炎出した後が鬼畜だ…。んで、どうなんだじじい。ルール守って時間も守ってやったぞ？」

「…よろしい…。」

大きなノートに続け字で書いてある字はどうやら本田以外は読めないらしい。

「君は——Yクラスに行きなさい。文句や口出しをしたらAクラスじゃぞ。」

「ハイハイー。」

階段などにとりつけられている学校全体図。どうやらFクラスは9階らしい。

「つつつ…、足疲れるぜ…Aクラスってよさそうに思えるけど悪いのかな…。んあ…ここだ。」

トネクト学校。(後書き)

前回は感想有難うございました^^
嬉しいです^^

抹茶味

「…ん…、新入生ってコイツか…？」

女顔でボーイッシュな感じの奴が席を立ち黒板の前に立ってチョークで大きく

『新入生』と書くところちに近づいてきて「名前は？黒板に書くから。」

「んあ…火奈っす…。」名前を照れながら言っていると黒板に大きく『火奈』と書かれて少し周りがざわついた。

「俺、抹茶。変な名前だけどお互い様だよな…、ははは！！」

とても美人なのに自分のことを俺と呼ぶ。この学校はおかしな奴が集っているらしい。

「あ…、えと、僕は、熊田…。よろしくお願いしますね火奈さん…。」

抹茶の次に立ち上がったのは『熊田』という人物。高校生くらいの背丈。明らかに弱そうだ。

「んと、俺は抹茶と熊ちゃんより弱いんだけど。塩田って言うぞ。きつと火奈ちゃんよりは年上だ。よろしくな…。」

次には一番後ろの席から出てきて名乗る。熊田よりかは年下で、抹茶よりは年上だろうと思われる人物。

「抹茶に熊に…お塩か…なんか笑える名前だなあ。んで、俺は火奈であって火奈ちゃんじゃないからな。」

ドイツもコイツもまるでお米に見えた。それはとても弱そうで絶対自分が上と感じたからだ。

「君いー。自分が上って思ってる。お兄さんはね、心読めちゃうの。ンフフ…。」

前のほうでさつきからずっと火奈を見ていた人物が口を開く。どうやら人の心を勝手に読み、それをみんなに言っている

らしい。自分のことをお兄さんと呼んでいたのだが年齢的にきつと

30歳以上の奴だ。

「なな…!!お前よりきつと俺のほうが上だぞ!?それより熊ちゃんのが上だと思っけど…」

「———ったく、勝手に心を読みやがって。まあいいけどさ。絶対俺のが上だね。お前らがどんなコネクトを持ってるかなんて知らねえけどよ、お前ら雑魚いでーす。って顔にさ、書いてんジャン。ははは…!!」

美人で女の抹茶が叫ぶようにしてキレた。

「だーらー!!お前言ったな!?俺、怒ったぞ。今めっちゃイラついたぞ。んだら勝負と行こうじゃないか。んー?」

「いいよ、望むところジャン。かかってコイよクソ女め。」

「んな…?今俺に向かって女って言ったな!?俺に向かってえええええ!?!」

すると火奈の後ろから、熊がボソリとつぶやいた。

「うう…、抹茶、男の子なんだよ…。女顔で、自分の事女って言う人が大嫌いなんだ…。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4670y/>

トネクター

2011年11月26日17時51分発行